



11 編は 主を、わたしは避けどころとしている(11:1) とダビデらしい言葉を用いて、揺るがぬ信仰を告白しています。主に逆らう者が、闇の中から心のまっすぐな人を射ようとしている。主に従う人に何ができようか、逃れよ、と弱音に潰れ込む声が聞こえます。それに対して主は聖なる宮にいます。主は天に御座を置かれる。御目は人の子らを見渡し/そのまぶたは人の子らを調べる(11:4) と、神は見ておられ、善悪は露見し、不法者には罰を、心のまっすぐな人には御顔を向けられると、詩人は無力感を打ち消

して、神の正しく見る目、慈しむ眼を思い浮かべて、神を信頼しています。子どもの頃、神はすべてお見通しだと母に言われ、緊張を覚えたことを思い出します。詩人は世の秩序が覆っていると感じる時、幼子のような素朴な信仰をもって生きたいのです。「讚美歌 21」には 11 編の讚美歌はありませんが、素朴な弦楽器とアコーディオンによるジュネーブ詩編歌があります。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=iIPtvgvZvBA&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=12&t=0s>

12 編は、逆に人間の罪を招く唇、舌を取り上げています。人は友に向かって偽りを言い/滑らかな唇、二心をもって話します。主よ、すべて滅ぼしてください/滑らかな唇と威張って語る舌を。彼らは言います。「舌によって力を振るおう。自分の唇は自分のためだ。わたしたちに主人などはない。」(12:3) 人間は友に向かっても、偽り、羞恥心がなく、二心、虚勢、権力欲、支配欲、自己保身の思いをもって話すと嘆きます。卑しむべきことがもてはやされていると感じます。それに対して 主は言われます。「虐げに苦しむ者と/呻いている貧しい者のために/今、わたしは立ち上がり/彼らがあえぎ望む救いを与えよう。」(12:6) と、神は苦しむ者の側に立つと仰せになっていると信頼を歌います。詩人は彼らに語られる神の救いの約束の言葉は、土の炉で七たび練り清めた銀 と、その確かさを思い起こしています。「讚美歌 21」には 12 編はありませんが、人間の醜さを悲しむように響くジュネーブ詩編歌があります。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=3zH6z15z2kU&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=13&t=0s>

13 編では詩人は待ちきれない思いを、爆発させたかのように、冒頭に繰り返して歌います。

いつまで、主よ/わたしを忘れておられるのか。/いつまで、御顔をわたしから隠しておられるのか。(13:2)

いつまで、わたしの魂は思い煩い/日々の嘆きが心を去らないのか。/いつまで、敵はわたしに向かって誇るのか。

「いつまで」という言葉を私たちは苦しい時ほどよく口にします。嬉しく楽しい時はあっという間に過ぎるのに。意に反したことが続く時は、その時間が長く感じられ、忍耐することがとても辛いのです。敵は外敵だけではなく、即座に決断実行すべき時に、なぜか、躊躇し、優柔不断になる自分でもあります。揺れ動き、思い煩い、嘆く。これが人間の現実でしょう。その時、詩人は光を求めて あなたの慈しみに依り頼みます と神に呼びかける時、わたしの心は御救いに喜び躍り/主に向かって歌います/「主はわたしに報いてくださった」と(13:6) と愛と平安を噛みしめるのです。「讚美歌 21」では 13 編に 532 「やすかれ、わがこころよ」を結び付けています。やすかれ、わが心よ。主イエスは共にいます。痛みも苦しみを静かに忍び耐えよ。主イエスの共にませば 耐え得ぬ悩みはなし との言葉は 17 世紀末のカタリーナ・フォン・シュレーゲル。それと常に共に歌われる曲がフィンランディアです。ジュネーブ詩編歌では通奏低音が、途中から弾けるような変奏になって響きます。

参照 https://www.youtube.com/watch?v=F5zg_af9b8c

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=3Y0O36IKoQI&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=14&t=0s>